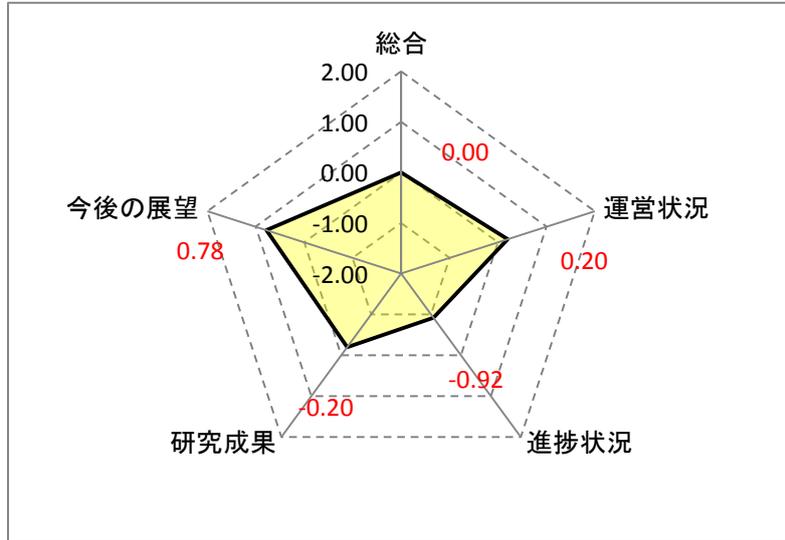


戦略的研究推進センター平成27年度研究プロジェクト評価

研究プロジェクト：萌芽研究部門

オープンデータ解析モデルの構築と地域への効果の研究

	総合	運営状況	進捗状況	研究成果	今後の展望	得点の平均
得点	0.00	0.20	-0.92	-0.20	0.78	-0.03
評価	C+	C+	D+	C-	B-	C-



(評価コメント)

【総合評価からのコメント】

・オープンソースであるRubyを用いて本課題を進めようとしているが、Rubyであることの有位性が明確でない。特に広域にわたるビッグデータを活用するのに現状ではRubyは少し不利な点があるように感じる。
 ・研究自体が地域貢献となるテーマであり、シンポジウムや講演会などの地域貢献を積極的に行っている。全体として、全国の自治体へアンケート調査を行うなどの積極性は評価でき、結果が興味深い。
 ・自己評価もCとされているが、取り組みの遅れや成果が弱いように思える。したがって、自己評価を妥当と判断する。
 ・構築されたオープンデータを集積・解析するフレームワークを活用した情報の集積・解析、効果分析が継続的に進められることを期待する。
 ・本学独自の重要なプロジェクトだけに計画進捗の遅れは残念。
 ・組織・研究にRubyプロジェクトとの重複がみられる。研究進捗にやや遅れがみられる。
 ・7名の組織である。論文掲載の計12件は、一人当たり1.71であり、社会科学系と情報科学系の分野を融合して堅実に活動しているといえる。科研費3件を含む外部資金は一人当たり113万円と健闘している。情報文化学会賞の受賞があり成果のレベルの高さがうかがわれる。4件の地元セミナー、22件の関連ソフト関係者集中作業イベント(ハッカソン)などを行って地域貢献も盛んに行っている。今後は、自治体等との連携構築が期待される。
 ・自己評価の通りである。
 ・自己評価でも触れられているが計画の遅れが見られる。原因にはシステムの普及が十分ではないことが挙げられているが、どのようなことができるのか、「効果の発信」がより必要なのではないだろうか。

【各評価項目からのコメント】

・産官学の連携を前提としたテーマであり、自治体との協働を積極的に行っていることは評価できる。システム構築までの途中段階では成果や進捗状況がわかりづらいことは理解できる。
 ・本萌芽プロジェクト研究の計画書に、「本研究は島根県地域という限られた地域内であるが、データの集積(集積ツールの構築)と、集積されたデータの統計的分析によってビッグデータの活用による地域マネジメントの研究や経済効果を直接推計すると同時に、推計手法の確立につながるものとしてユニークであり、重要性のあるプロジェクトである」と述べられ、地域と密接に関連した研究活動であることをアピールされている。ところが、島根県ではなく、全国のオープンデータを対象に解析されたのであれば、Rubyに拘る必要性はないように思われます。また、国際学術雑誌に掲載された論文が2編ありますが、本プロジェクトの根幹課題ではないような印象を受けました。研究計画が地域の実態と合っていないのかもしれませんが、結果のみ考えますと、本学で推進する萌芽プロジェクト研究としての意義が乏しいように感じられました。
 ・シンポジウムやハッカソンの開催など、外部に向けた公表・啓蒙活動は順調に進んでいるようだが、予定していたオープンデータの活用と効果を集積・解析するツールの構築が遅れていることが、全体的な進捗を妨げているように感じる。昨年度もツール構築の遅れを自覚し、最重要事項に定めているにもかかわらず、進捗が芳しくなかったのは残念。
 ・オープンデータを集積・解析するツールの開発はともかく、分析するシステムの構築までは短期間では難しかったということのようですが、ビッグデータの集積、解析、活用は様々な分野で重要になっており、より効果的に新しいツール、システムの開発への展開を期待したいところです。
 ・学術論文や学会発表などは十分行われている。
 ・研究成果の一つの柱はオープンデータの活用・分析のためのフレームワークであるが、もう一つの柱はオープンデータを用いた分析である。後者が十分実施できなかった点は残念。
 ・日本ではオープンデータの活用は十分ではないようであるが、今後は各自治体における有効利用が期待できる。
 ・今後の活用方法が示されているが、まだ概念的で実現性が見えてこない。